

新しい年を迎えました。今朝はその最初の主の日です。わたしたちはまず、聖書の語るみ言葉に聞いて、神を礼拝し、この一年の歩みを始めてまいりましょう。今日からまた、わたしたちが読み進んできた使徒言行録に戻り、み言葉に聞いてまいります。

さて、パウロとバルナバは伝道の旅を続けていました。この旅はシリアのアンティオキアの町にあったアンティオキア教会から始まりました。彼らはその教会から送り出されて伝道の旅に出たのでした。この旅が、パウロの第1次伝道旅行といわれるものです。この旅がどんなものだったのか、それが使徒言行録の13章14章に記録されているのですが、わたしたちの想像を遥かに超える困難や驚きや喜びがあったのではないか、と思います。魔術師に出会ったり、パウロたちが神々に祭り上げられたり、町の人々の間に分裂が起こり、騒動が起こったり、パウロ自身が石を投げられ、九死に一生を得たり、その歩行距離は1000キロを超えるものでした。大変な旅というような言葉ではとても表現しきれないものだった、と思います。

パウロは、リストラの町で石を投げつけられ、死んだと思うほどの状態だったのに起き上がり、バルナバと共にデルベに向かい、また自分たちが旅して伝道した町を辿りつつ、帰路についていきます。来たときの道・往路と帰りの道・復路と同じ道で行く。これはとても危険を伴うことです。なぜなら彼らが伝道した町では、キリストを語ることでその福音に聞くものがいた一方で、彼らを攻撃するユダヤ人やほかの人々がいたからです。

しかしパウロもバルナバも、伝道した町を多く再訪し、シリアのアンティオキアに帰っていくのです。地図で見るとよくわかるのですが、デルベまで来ているのだから、陸路で、シリアのアンティオキアに戻った方が、安全だし、近い。したがって研究者の中には、この復路は実際は陸路で帰ったのではないか。使徒言行録の著者ルカは、そのことを知らなかっただけではないか、というような想像をする人もいます。しかし、危険を伴うことだから、この復路は無理がある、という想像はそれほど単純に頷けるものではありません。むしろパウロは21節22節にあるように、自分たちが伝道した町に引き返しなが、弟子たちを力づけた。危険を承知で、それぞれの町の教会を再訪し、励まし、それぞれの教会の長老を任命し、共に祈り、主にその教会を委ねて帰路を進んで

いったのです。

二人は、キリストの福音に聞き始めた一人一人を力づけ、教会の働き、制度を整え、これからも福音に生きる歩みを続けていけるよう、祈ったのです。だからどうしても、復路も同じである必要があったのです。

キリストの弟子となった者たちを力づける、その力づけの内容は具体的には二つのことでした。一つは、神の国に入るには、多くの苦しみを経なくてはならない、ということ。もう一つは、信仰に踏みとどまりなさい、ということです。最初の言葉は、後で考えるとして、信仰にとどまるように、とはどういうことなのでしょう。

パウロとバルナバが各地でイエス・キリストの福音を伝道した、そこは言うまでもなく真空地帯ではありません。もうすでに様々な宗教や、文化や、慣習のある場所です。ユダヤ人の抵抗が強くあり、魔術師が活躍している場所もありました。また神々の力を強く感じている人々もいました。福音伝道は二千年前から、さまざまな壁にぶつかり、困難に直面していったのです。

パウロが反対勢力の人々によって石を投げつけられた、ということは確かにパウロ個人がユダヤ教側にいた人間として、特別の反感を買った、ということもあるかもしれません。しかし、そうだとすると、すべては福音を語るということで起こってきた事柄です。語らなければ、起こらない。語ったから起きたことです。語ったから壁にぶつかり、困難に直面し、かつ福音を信じる者も生まれてきたのです。

こんにち、わたしたちが福音を語れば、パウロがバルナバが直面した壁とは違う壁にぶつかるでしょう。違う困難に直面するでしょう。しかし、根本の構図は変わっていない。現代には現代の魔術師がいて人々を虜にしていたり、現代には現代の神々がいて、人々の心の中に入り込んでいるのです。だから、福音を語れば、壁や、抵抗や無視といった困難に直面していくのです。

その中で、パウロは「信仰にとどまる」ということを語っているのです。それは内容的に言えば、キリストの恵みのもとにとどまる、ということです。どんなにさまざまな困難があっても、キリストの十字架によって我々の罪が担われ、赦され、復活のいのちに生かされている、というその恵みの事実から離れない、ということです。これこそがまことわたしたち人間の救いなのだ、という恵みに堅く立つ、ということです。

信仰にとどまる、恵みのもとにとどまる、これがキリスト教信仰にとって最も大事なことです。別の言い方をすればそれがキリスト教信仰の基本的な性格

なのです。わたしたちの信仰というのは、わたしが何かをする、頑張っ
てよりよい自分になる、ではまずないのです。恵みのもとにとどまる、キリストの恵
みを受け続ける、恵みから離れない、それはまったく受動的なことです。み言
葉に聞くということも、まったく受動的なことです。それがわたしたちの信仰
の歩みの基本的な姿なのです。おそらくキリスト者とは、この世界に対して、
恵みのもとにとどまる、という形で向き合っている存在、といえるのだと思う
のです。この世界の価値や、思想や、文化や、さまざまなものが変化し、流れ
ていく中で、キリスト者とは、十字架と復活の恵みもとにとどまり続ける存在
として、あるのだということです。

そしてパウロとバルナバもう一つのことを言っています。神の国に入るには、
多くの苦しみを経なければならぬ、ということです。普通に考えれば、苦し
みを経なければならぬ、というような言葉が力づけの言葉になるとは思えな
い。にもかかわらず二人それを力づけの言葉として語っているのです。

福音書に大勢の群衆が主イエスのもとに集まり、夕暮れになり、空腹を覚え
た群衆を弟子たちが解散させましょう、といったとき、主イエスが「あなた方
の手で食べ物をやりなさい」といわれたことが記されています。主イエスは弟
子たちの持てるものを用いて、弟子たちを用いて、ご自身の業を進めするこ
とを望まれたのです。キリストがお一人で神の国の業をすべて進めていくのでは
なく、この貧しい、弱い、小さい器を用いて、神の支配が実現することを望ま
れたのです。それは弱く、もろく限界わたしたちの口から福音が語られるこ
とをキリストが望まれた、ということです。

また福音書には、種まきのたとえが語られています。ある種は道端に落ち、
ある種は石だらけの地に落ち、またある種は茨の中に落ちたのでした。たくさ
んの種が全く実を結ばなかった、といているのです。失敗したのです。振り
返ってみれば、伝道の歩みは惨憺たる失敗の繰り返しだった、ということがあ
のたとえで語られているのです。だが、しかし、その失敗の中でも、良い土地
に落ちて、芽生え、育って、実を結んだものがあつた、ということです。神の国
はそうして前進してきた。失敗の連続の中で、実を結ぶということが起こっ
ていく、そういう仕方前進してきた、と種まきのたとえで主イエスは語られた
のです。

つまり、神の国に入るには、多くの苦しみを経なければならぬとは、わた
したち自身が、恵みのもとにとどまり、キリストがこのわたしの弱く、もろく、
貧しい器を用いていかれることを信じて、種まきの働きを続ける、ということ

です。

そこで失敗し、挫折することをくりかえしながら、なおそこでキリストの恵みのもとにとどまり続け、共に歩んでくださる主を仰ぐのです。

例えば。家族伝道。近しい人への伝道。それはほんとに失敗の連続です。挫折の繰り返しです。だから、もう何をやっても無駄。もう何もしない、ということにもなりがちです。しかし伝道は失敗の中で、挫折の中で前進していくのです。失敗する中でキリストと出会うのです。挫折して、十字架のキリストと出会うのです。そしてそこでまた、キリストの恵みのもとにとどまる、ということをやい深く味わっていくのです。だから神の国に入るには、多くの苦しめを経なければならぬ、という言葉が力づけになるのです。

二人はシリアのアンティオキア教会に戻り、伝道旅行の報告をします。その報告は、「神が自分たちと共にいて、行われたすべてのことと、異邦人に信仰の門を開いてくださったこと」の報告でした。

2018年の年初にわたしたちは信仰にとどまる、ということ、そして神の国に入るには多くの苦しめを経なければならぬ、という力づけの言葉を受けたいと思うのです。そして神が共におられるのだから、門は必ず開かれていくのだ、ということを感じて、歩いていきたいと思うのです。